
枯葉三枚分の時間

しげる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

枯葉三枚分の時間

【Nコード】

N5500I

【作者名】

しげる

【あらすじ】

僕と彼女に残された時間は、枯葉三枚分……

時計は午前七時を五分ほど回っていた。

ベッドから半身を起こした状態で、左手側にある窓の外を見る。

早朝なので人通りはそれほど多くはない。よく見ると、通行人の手には大抵手袋が嵌められている。襟元にマフラーを巻いている人もちらほら見られた。昨日の天気予報で言っていたように、今日から本格的に冬の気候へ移り変わるようだ。

その寒さに加え、今日は風も強い。時折、ひゅう、という風の音に合わせて、すぐ目の前にある銀杏の木が、四方に伸びた枝をかさかさ揺らすのだった。そして風が吹くたび、残り少ない銀杏の葉が、ひらひらと街の彼方へ消えていく。その行方を追う。見えるのは無機質なビルの群。

「おはよう」

ドアの開く音。そして彼女の声。

僕が彼女と付き合いだしたのは、一年半ほど前のことだ。出会った場所は、僕の自宅近くにある総合病院。彼女はそこで看護師として働いていた。入院を余議なくされ、不安に押しつぶされそうになる僕を、彼女は屈託のない笑顔で励まし続けてくれた。そんな彼女に好意を抱くのには時間はかからなかった。猛アタックの末、私たちは晴れて恋人同士となった。

「どうしたの？ ぼんやりと窓の外を見て」

僕は窓の外を見たまま、ゆっくりと口を開いた。

「今日はとても寒そうだ。ほら、あの人を見てよ。コートにマフラーに手袋。完全装備だ」

「あら、本当」

「それに風も強い。さっきから銀杏の木が踊り乱れている。葉っぱも、ほとんど風にさらわれてしまったね。残ったのは……」

一番太い枝にくっついて三枚だけ。

「なあ、あの葉っぱなんだけどさ」

「葉っぱがどうかしたの？」

「あの銀杏の葉っぱが全部散っても……、俺、こうやって君の隣にいることができるのかな」

僕の唐突な質問に首を傾げる彼女。

「なにを言っているの？」

ゆっくりと彼女の方へ視線を移す。

「ごめん。戸惑うのも無理ないよな、いきなりこんなこと言われたら、その反応も当然だ。でも、なんだか不安なんだ。俺に残された時間は、もう長くはない」

「……またくだらないことを考えて……」

彼女はふつと溜め息をついた。彼女の表情は困惑に満ちていて、どのような言葉をかければいいのか決めかねているようであった。

風の吹きすさぶ音。三枚の内の一枚が風に飛ばされていく。

「残りはあと二枚、か」窓の外に目をやりながら「もしも、まだ可能性が残されているなら、僕はそれに賭けてみようと思う。残りの葉っぱが全て散って、僕がまだ君のそばに居ることができるのならば、君を愛していると、心の底から叫びたい」

彼女の瞳を窓ガラス越しに見つめる。僕の心を掴んで離さない、透き通るように綺麗な瞳。

「でも、その賭けは……」

その瞳が妖しく笑った。彼女はこちらに近づき、両手を僕の首に伸ばしてきた。そして――

「あなたの負けみたいね――」

「いつてきまーす」

駄々をこねても仕方ない。さつさと会社に行きますか。

アパートのドアを開けると、彼女の結んだネクタイが風になびいた。

（後書き）

初投稿です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5500i/>

枯葉三枚分の時間

2011年1月9日04時16分発行